

温泉コラム

● 第 7 回 ●

「道東編・其の壱」

札幌呼吸器科病院 薬剤部

河野文昭

(温泉ソムリエ・温泉保養士・温泉入浴指導員)

1. 釧路市内の温泉

前回は帯広・十勝をテーマにしたのですが、今回はそれよりもさらに東、道東エリアを広く紹介したいと思います。

まずは釧路の温泉から紹介するわけですが、皆さんは遠巻きに北海道の地図を見て、「帯広と釧路は近い」という印象を持ったことはないでしょうか？しかし実際にこの二都市間を移動してみると、実は相当な距離がある事が判ります。北海道は距離感がおかしくなる…という言葉は、道東エリアにこそ相応しい言葉だと思えます。距離が離れると地質も変わってくるわけで、その違いは当然地下水でもある温泉にも表れてきます。今回は、そんな釧路市の温泉から紹介していきます。

釧路といえば釧路湿原が有名ですが、某教養番組でも取り上げられていた通り、この一帯は大昔に海に沈んだり、陸が出来たりの繰り返しを経た経緯があります。その結果、生じた砂洲の水はけが悪くなり、現在では釧路川河口部よりも奥地にて河川の水が溜まり、あの広大な湿地帯が形成されているといわれています。

こうした経緯を象徴する温泉の一つに、釧路市最大の歓楽街である末広町に存在する「ビジネスホテル・釧路パコの湯」があります。徒歩1分で幣前橋や飲み屋街に至るという好立地ながら、本格的な強塩化物泉を有しており、日帰り入浴でも

利用可能となっています。源泉は28.8℃で、泉質はカルシウム・ナトリウム/塩化物泉、成分総計19780mg/kgの高張性低温泉で、その成分を見るとほぼ塩化ナトリウムと塩化カルシウムが主体となる海水温泉だという事が判ります。微量ではありますが臭素イオンやヨウ素イオン、あとストロンチウムイオンが検出されている辺りもどことなく海水感があり、色も透明で味はかなり塩っ辛いです。浴場はホテル内の高層階にあり、露天風呂からは末広町を含む釧路市内が一望できるなど、ロケーションも優れている事から、旅行で使うには最適な施設となっています。

先ほども書いた通り、この一帯は過去に何度か海中に沈んだり陸地になったりを繰り返してきた経緯がありますから、地下水脈に濃い塩分が出るのは必然といえれば必然なわけですね。その為、パコの湯に限らず釧路市内の温泉はいずれも海水を感じさせる泉質となっています。例えば釧路市文苑にある「ふみぞの湯」は源泉温度24.5℃、成分総計21250mg/kgのナトリウム・カルシウム/塩化物泉を有しており、パコの湯同様に透明な塩の湯となっています。湯に触れると指と指の間にぬるりと湯が張り付くような、濃い塩分に由来する独特の浴感(表面張力が違う)があり、浴後の発汗からも強烈な温熱効果がある事が判ります。広い駐車場を共有した床屋やスーパーも隣接しており、設備そのものも新しい為か、世代を問わず多くの市民から愛される温泉銭湯となっています。(テーマソングもある。)

源泉温度はそれほど高くない釧路市内の温泉ですが、塩分が多いという事もあり、掘り当ててしまえば高確率で温泉を標榜する事が出来ます(現行法では成分総計で1000mg/kgを越えたら温泉と認定される)。現代の温泉大国日本においては、住宅を建てる際の地質調査で温泉を掘り当ててしまう事も割とあるようで、釧路市内には「ふみぞの湯」以外にもそれっぽい温泉銭湯がいくつか存在している事が判ります。

釧路市内に複数の銭湯を運営する大喜湯の春探店では、釧路市新富で湧出した源泉温度27.4℃、成分総計22200mg/kgのナトリウム・カルシウム/



参考資料①：釧路市内の温泉。探せば他にもあるかもしれない。

塩化物泉を使っています。その濃度からも分かるように、味もかなり塩辛く、透明な海水温泉といった雰囲気のお湯が特徴です。源泉湧出地の新富は釧路駅の近くで、古くから住宅の建ち並ぶ区画ですので、もしかしたらこれも土地調査か何かの際に湧出した源泉かもしれません。温泉が出たからといって、いきなり地価の高い駅近くの住宅地に大規模な温泉銭湯を建てるわけにもいきませんので、敢えて商業施設の集まる春採にお湯を運んで使っているようです。強塩化物泉は消毒・循環させてもあまりお湯の質感が低下しないので、資源を有効活用した合理的な使い方とも言えますね。ここでは温度の異なる2種類の水風呂、サウナ、露天風呂など設備も充実しているので個人的にもお勧めの施設です。

大喜湯の系列店である大喜湯昭和店(大喜温泉)も住宅地の中にある温泉銭湯ですが、湧出地と所在地が一致しているので、自家源泉の温泉銭湯という事になります。源泉温度38℃、成分総計19320mg/kgというナトリウム・カルシウム/塩化物泉で、成分上はこれまでに紹介した温泉と非常によく似た高張性泉となっていますが、38℃の源泉は他と比べても少し温度が高く、見た目も薄緑色と独特の色調を持っています。微かに土の匂いがするので、モール泉とまではいかないまでも、僅かに腐植質を含んだ温泉だと思われれます。38℃の源泉だとそのまま利用するには若干ぬるい事から、多少

の加温はしてあります。開放的な露天風呂の他、入浴剤を使った変わり湯やログハウス調のサウナなど、魅力的な設備が充実しており、飽きの来ないラインナップとなっていました。休憩と交代浴でしっかりと温まれる温泉といえますね。

腐植質の気配は釧路市外の温泉に目を向けるとより判り易い兆候が見受けられます。釧路湿原のほど近くに湧く山花温泉は、市内の温泉以上に濃い塩分(約30000mg/kg＝海水とほぼ同程度)を含んでいます。同時に明らかな腐植質を含んだ濁り湯でもあります。源泉温度は約35℃で、日によって薄緑色で透明な時もあれば、濃い緑茶のような濁度のある褐色を呈する場合もあり、その濃さや匂いから南幌温泉や北村温泉に近い印象を受ける温泉です。

面白い事に湿原の奥(北側)のエリアになると、海水の影響が弱いのか、塩分が薄れると同時に今度は地熱傾向が強く現れ始めます。シラルト口湖温泉(茅沼温泉)では成分総計9474mg/kg、源泉温度47.1℃の等張泉(ナトリウム/塩化物泉)となり、お湯も微かに腐植質の混じる特徴(土の香りと微弱な濁り)を呈しています。

湿原から離れた鶴居村のグリーンパークつるい温泉(ナトリウム/塩化物泉)になるとさらに成分は薄くなり、こちらは成分分析表の確認ができなかった温泉ですが、公式HPによると源泉温度は

46.2℃と高温で、かつ低張泉(8000mg/kg未満)との事ですので、入った感じでは恐らく3000mg/kg前後なのではないかと思われま。色もハッキリとモール泉と判る茶色をしており、明らかに帯広エリアの温泉に類似した特徴を有しています。

これ以北では標茶町や弟子屈町など、道東の広いエリアで成分の薄い単純泉が見受けられるようになっていきます。このうち、モール泉は標茶町(オーロラ温泉・標茶温泉)や別海町(別海ふれあい温泉)など東西に带状に連なるエリアで確認されていて、特に45.1℃の標茶温泉・味幸園(アルカリ性単純泉)は自噴源泉である事から、道内でも最高泉質といっても良いレベルのお湯が湧出しています。

このように、腐植質の存在や成分の濃度で温泉の性質を追ってみると、釧路市内の温泉は海水とは切っても切り離せない関係にある事が判ります。海水の影響は湿原の奥に至るにつれて薄くなっていき、屈斜路湖を中心とした火山地帯に近付くと今度は地熱が高まっていくのです。釧路市内は基本的に温度の低い温泉しか出ていない訳ですが、強塩化物泉には高い温熱効果があり、しかも加温してしまえば高温で湧出する温泉と効果は全く変わりません。特に釧路のように気温の低い地域に住む人々にとって、こうした熱の湯は健康を維持する上で大変有効な手段になります。海と湿原が育んだ釧路市の温泉は、広大な農地同様に自然からの贈り物だという事です。

2. 阿寒湖温泉と野中温泉

釧路から北へ向けて温泉を追っていくと徐々に地熱は上昇し、やがて阿寒湖温泉や川湯温泉といった有名な温泉地に辿り着きます。

活火山である雌阿寒岳・雄阿寒岳に挟まれた阿寒湖周辺には複数の温泉が湧いており、阿寒湖温泉だけでもホテルや公共浴場によって十数個もの源泉が使い分けられています。代表的な湯としては、温泉神社のすぐ裏手に古くから使われている源泉があるようで、これは温泉街の中心にある「まりも湯」等で入る事ができます。無色透明・無味無臭の美しい単純温泉で、成分分析表によると741mg/kgのうち292.7mg/kgが炭酸水素イオンとなっ



参考資料②：阿寒湖温泉神社の裏手にある源泉

ていますが、液性はアルカリには寄らず、pHは7.1を示していました。温度は59.6℃もあり、いわゆる「絹の湯」と呼ばれる肌触りの良いお湯となっています。これだけ見ると阿寒湖の豊富な水量を象徴した透明な温泉のように思えますが、鶴雅グループのホテルで使われている新7号源泉など、湧出した場所によっては、淡黄色をした腐植質の気配を感じさせる湯も出ているようです。

また、阿寒湖温泉とは少しだけ離れますが、ラピスタ阿寒川が使用している雄阿寒温泉も微淡黄色を呈しており、全体的に阿寒湖に由来する水の割合が高い泉質のようですが、地下には相応の腐植質が存在しているようです。

阿寒湖近辺で注目すべきは雌阿寒岳を挟んで裏側のオンネトー付近に湧く野中温泉(雌阿寒温泉)で、成分総計4022mg/kgの含硫黄・カルシウム・マグネシウム・ナトリウム/硫酸塩・塩化物泉という長ったらしい泉質の名湯です。源泉温度は



参考資料③：野中温泉の源泉は美しいエメラルドグリーンを呈す。それほど熱くないお湯だが、大量の硫化水素が肺や皮膚を通じて吸収される為、浴後は異様に疲労する。

43.2℃と浴用に最適の温度で自噴しており、湧出量も豊富。浴槽とはほぼゼロ距離で湧出している為、お湯の鮮度も抜群でしかもガス型の硫化水素を28.5mg/kgも含んでいるという、ガッチガチの硫黄泉になります。総硫黄分が2 mg/kgを越えれば硫黄泉を標榜できますから、実に基準値の30倍近い基準の硫黄を含んでいる訳です。しかも、その殆どがガス型で存在している為、実は大変デンジャラスな温泉となっています。

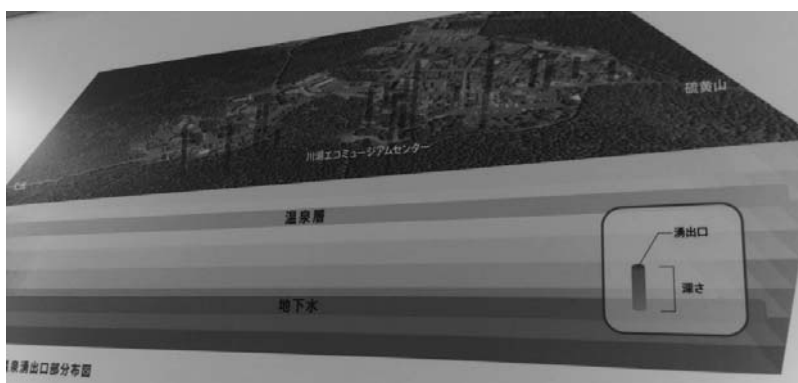
換気が不十分だと大変危険なので浴場の窓は基本的に解放されていますが、それでも脱衣所には頭がクラクラしてくるような硫化水素臭に加え、石油のような香りが漂っています。石油成分は成分分析表に載らないので詳細は不明ですが、浴感ではその存在を裏付けるように、豊富温泉に似た肌にネッチョリと張り付く感覚がありました。かなり強い湯である為、体力のない人には向かない泉質ではありますが、高いホルミシス効果が期待できそうな温泉です。

ちなみに、オンネトーの奥地には天然記念物であるオンネトー湯の滝という大変珍しいマンガン床の温泉が湧出しておりますが、苔も多いし熊も出るので、ここは見るだけにしておきましょう。

3. 硫黄山を中心とした温泉脈・川湯温泉と摩周温泉

阿寒湖温泉から東にある川湯温泉と摩周温泉は、硫黄山を挟んで南北に開けた集落に湧出しており、その対照的な泉質が面白い温泉です。

川湯温泉では町内の地面を数メートル掘っただけで強酸性の高温泉が湧くそうで、水脈は温泉脈の更に下にあるという珍しい地性を有しています。酸性の強い温泉が染みた地面では作物が育たず、昔は飲料水の確保にも苦労したという話が残っています。湯に晒した金属(釘)が数日で腐食してしまうという、道内でも特に強烈なインパクトのある温泉地です。



参考資料④：川湯温泉の地下水は温泉層の下にある為、地面を掘ると先に温泉が湧く。

資源は豊富ながら、酸性の強い川湯温泉の湯は扱いが難しく、個別の宿泊施設が源泉を有するのではなく、町(組合)が一括管理による配湯を行っています。この為、タンクや配管ルートによる差はあるかもしれませんが、温泉そのものは公共浴場でもホテルでもほぼ同じお湯が使われており、浴感にも特に差はありませんでした。どこの宿泊施設に泊まっても泉質に差はないので、価格や設備のグレードで自由に宿を選べるのは利用者にとってはありがたい要素かもしれません。

川湯温泉は成分総計4134mg/kgの酸性-含鉄(II)・含硫黄-ナトリウム/硫酸塩・塩化物泉という泉質で、硫黄由来の鮮やかな薄緑色を呈したお湯となっています。湧出直後は透明で、曝気時間が長くなる事で徐々に白濁していきます。pH1.8と胃液並みの強酸性があり、その蒸気で町中の家電製品が短命に終わるとい話もあるそうです。ここまでお湯の成分が強いと、蒸気を吸うだけでも人体には何らかの影響が現れます。町に滞在するだけでも一定の転地効果が得られる温泉と言えるでしょう。

川湯温泉は札幌圏からもだいぶ遠い場所にありますが、群馬県の草津温泉や秋田県の乳頭温泉郷といった、日本を代表する数々の名湯にも負けない泉質と、近隣に硫黄山や屈斜路湖、摩周湖など、大変豊富な観光資源を有した温泉です。旅を焦らず、数日間滞在して、湯煙立ち込める川湯の森を散策するくらいの余裕が欲しいところです。

さて、泉質的には硫黄山の特徴を最大限に表している川湯温泉ですが、実はこの強酸性の硫黄脈は山の北側にのみ集中しており、南側に湧出している単純泉の温泉群については意外に知られていません。弟子屈市内各地に湧出する摩周温泉は、生活施設として古くから市民に愛用されてきた温泉です。

摩周温泉といえば道の駅の足湯は入った事がある、という人は割といるでしょうが、弟子屈市内の温泉銭湯に入った事のある人は少ないのではないのでしょうか。私が実際に入浴したのは「泉の湯」と「亀の湯」という二湯ですが、実際には旅館等も含めて他にもいくつかの入浴施設があります。

「泉の湯」は源泉名を摩周温泉といい、町営の施設なので入浴料はなんと200円。町内に湧くいくつかの源泉の混合泉が使用されていて、成分総計2540mg/kgの透明なナトリウム/塩化物泉です。大昔に噴火の影響を受けたエリアという事も影響しているのか、見た目の性状に有機物を感じさせる濁りや色が無く、無色透明・無味無臭の澄んだ温泉となっています。日常的に使いやすいタイプのお湯ですが、温度は77.6℃もあり、少量フローによる源泉かけ流しであるため、かなり熱いお風呂となっています。素晴らしい。

一方の「亀の湯」ですが、かつての名称は鑛別温泉といい、現在は桜丘温泉と呼ばれている源泉を使用しています。こちらは混合泉ではなく単一源泉の銭湯で、やはり町営なのか200円という破格の値段で入浴できました。泉質は成分総計1501mg/kgのナトリウム・カルシウム/塩化物・硫酸塩泉で、泉の湯同様に全くクセのない無味無臭・無色透明の温泉です。こちらも「泉の湯」同様に源泉温度は74℃もあり、少量フローによる掛け流し方式を採用しています。確実に浴槽温度は45℃以上あると思われそうですが、各々水で埋めて調整するというルールになっているようです。

ちなみに、先に書いた川湯温泉の公共浴場も源泉の少量フロー方式で、やはり浴槽は45℃以上の超激熱にしてありました。もちろんぬるい方の浴槽も用意してあるのですが、観光客の中には熱い方の浴槽ですっかり戦意喪失してしまい、かけ湯だけをして帰っていく人もいました。やはり高温の温泉文化が根付いている事もあって、弟子屈町



参考資料⑤：弟子屈市内の亀の湯。お湯が高温な為、湯気の量がすごい。カランからも高温の源泉が出る為、洗い場での温度調整が難しい。

の人々は函館市民同様に熱いお湯が好みようです。銭湯は生活文化でもありますから、このような側面から市民生活の一端が見えて来るのも、温泉巡りの面白いところですね。

また、あまり知られてはいませんが、川湯温泉と硫黄山を挟んで丁度真裏にある美留和地区にも温泉が湧出しており、ペンションの宿泊客や別荘に住む人々だけが利用できるという、大変レアリティの高い温泉となっています。

この美留和温泉は目と鼻の先に硫黄山があるにもかかわらず、源泉温度47.7℃、成分総計803mg/kgと、川湯温泉とは真逆の肌に優しい単純泉となっています。川湯温泉とは直線距離として10km程度しか離れておらず、硫黄山を介して地下でどんな事が起きているのか不思議でなりません。美留和地区では摩周湖の伏流水が湧くそうですので、摩周温泉を含む硫黄山を挟んで東南エリアの温泉は、いずれも摩周湖由来の水なのかもしれませんね。

4. 様々な顔を持つ屈斜路湖の温泉

単純泉が多く湧出する硫黄山南東部とは反対に、川湯温泉街を西に抜けると、今度は風光明媚な屈斜路湖が見えてきます。この湖畔沿いには複数の温泉が湧出していて、いずれも個性豊かな泉質を有しています。

川湯温泉街から最も近い所にあるのが仁伏温泉で、屈斜路湖の湖畔沿いに湧く、成分総計856mg/kgの弱アルカリ性単純泉になります。源泉温度は

46.9℃あり、その透明度の高さから「水晶温泉」の異名をとるそうで、ほぼ中性(pH7.7)の源泉は全くクセが無く、家庭のお風呂感覚で入れる優しい温泉になります。匂いもほぼ無いに等しいのですが、注意深く何度もお湯を嗅いでみると、微かに土の香りがありました。ここは個人的にもお気に入りの温泉で、川湯温泉の上がり湯としては最高の泉質と言えるかもしれません。

続いて湖畔沿いを南下していくと、湖から直接温泉が湧く「砂湯」に到達します。ここは砂浜の底から温泉が湧いており、冬でも湖面が結水しない事でも有名な観光地となっています。砂を掘って蒸し風呂ができる面白いスポットではありますが、水が温かいという事で白鳥が押し寄せており、「実は白鳥の糞で結構水質がアレ」という事実は、案外知らない方が良かった情報かもしれません。

ここからさらに道道を南下して国道243号線の手前まで行くと、湖畔沿いにコタン温泉という黒みがかかった入浴施設があります。コタン温泉は成分総計1280mg/kg、源泉温度69.6℃のナトリウム/炭酸水素塩泉という薄めの泉質ではありますが、明らかに石油成分を含んだモール泉で、お湯に浸かるとネットリと肌に張り付く感覚と共に、強いアブラ臭が鼻につきました。共同浴場とは別に、地元有志による無料の露天風呂も併設されており、雄大な屈斜路湖を見ながらの入浴が楽しめるようになっています。裸一貫で味わう大自然は北海道！という感じで、実に良いものです。まさに五感で感じる温泉ですね。



参考資料⑥：砂湯の泉質はナトリウム/炭酸水素塩泉で、湧出温度は58℃。売店で飲泉も可能。



参考資料⑦：別荘地に置かれたヌプリオンド温泉のタンク。近隣のペンションで入れる。

屈斜路湖はそれ自体が巨大な火口部に由来するカルデラ湖ですが、砂湯やコタン温泉からも見える和琴半島は、湖面に頭を出した火山の山頂部だといわれています。その為、和琴半島の周囲ではあちこちで温泉が湧出しており、キャンプ場付近の「和琴温泉」を始め、遊歩道沿いの「桂月の湯」など、いずれも珍しい自噴温泉となっています。また、基本的に入浴は推奨できませんが、半島裏手にある「オヤコツ地獄」では100℃の源泉が轟々と音を立てて噴出しており、未だこの湖が活火山なのだという事を改めて思い知らされます。

いずれも野天風呂である事から泉質などの情報が無く、私は入浴しておりませんが、近隣にある「三香温泉」では成分総計630mg/kg、源泉温度48℃の弱アルカリ性単純泉に日帰り入浴する事ができました。こちらは見た目には少し黒ずんだ湯で、微かなアブラ臭からコタン温泉に近い印象を受けました。

次に屈斜路湖から少し離れますが、道道52号と国道243号線の交差点の近くには小規模の別荘地エリアが開かれており、ここではヌプリオンド温泉という温泉が供給されています。これは別荘地専用の温泉で、美留和温泉同様に居住者かペンションへの宿泊者のみが利用できる温泉となっています。

距離的には三香温泉やコタン温泉に近いヌプリオンド温泉ですが、泉質はナトリウム・カルシウム/硫酸塩泉になります。成分総計は1216mg/kgと同程度なものの、こちらはほぼ炭酸水素イオンを

含まず、腐植質のない無色透明の温泉です。炭酸水素イオンが殆ど検出されない温泉は北海道では珍しく、カーボンが無いという事で香りも土っぽさもあります。どちらかという和本州山間部によくある泉質ですね。

宿泊客しか入れない点といい、あまり商売つ気のないヌプリオンド温泉ですが、どこか嫌世的な雰囲気漂う別荘地に、しっとりとした泉質が妙にマッチしていました。

5. 最後に

さて、今回も前回以上の長文になってしまったのでここまでにしておきますが、道東の温泉はまだまだほんの一部にすぎません。面積が広ければ地質も泉質も変わるのは当然で、蓋を開けてみればまるで宝石箱のような魅力があるのが、北海道の温泉です。

新型コロナウイルスの第三波到来で、GO TO トラベルの運用にも色々と賛否両論出ている昨今ですが、こういう時こそ地元北海道の温泉の魅力を再発見してもらいたいものです。

高湿度環境である浴場では感染リスクはそれほど高くはなく、むしろ温泉で身体を温める事は免疫力を高める事にも繋がります。銭湯や温泉で身体をキレイに洗い、誰とも会話をせず、一人で静かに湯と対話する…これが今、我々に求められている感染対策なのではないでしょうか？